

招隱館漫筆

上

番外書冊

1467

庫	文	閣	內
八二二架	三四三九冊	和	書
二架	三冊	類	類

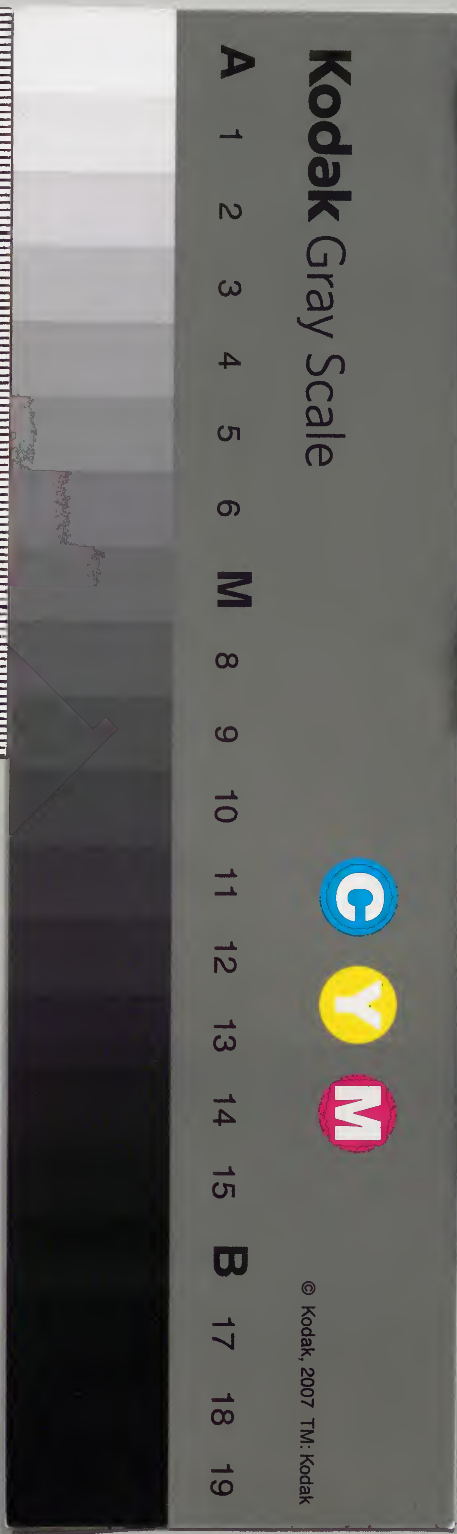
(一)

內閣文庫	
番號	和 24219
冊數	3 ( 1 )
函號	182 462

儒家 二ノ一

共三本

182-462

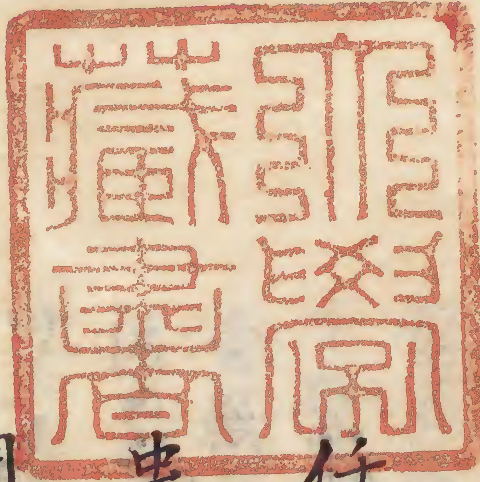




Vertical text impressions in the top left area of the left page, including characters like 備前 and 備後.

三

三



閨門

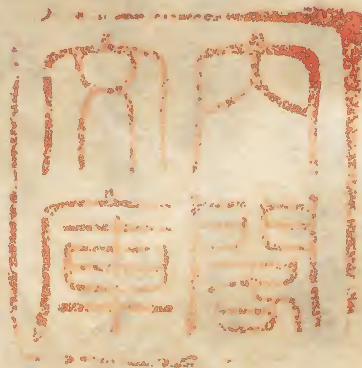
盡惑

任使

似而非

拒諫

天職



淺草六庫

奢儉

賞罰

礼樂

富國強兵

教學

招隱館漫筆卷之一

鸞岳源頼紀著

天職

恭誓云惟地萬物又母惟萬物之靈形也  
 之六天地の多おと生きたる中人程貴ものわきあ  
 わるは宇宙の曠ちわく此氏の繁茂の或いは  
 下以堂一或おきて闘争強弱と後き大い小と制で  
 禽獸の相羣居する如くあは天其長とて是を  
 治めよと天子とて其制を受くる者と天氏と  
 して天子亦諸侯とて各分て其國を治る故に  
 君と民との貴賤異わきとも是を要するのみ齊しき

天氏が唯天を以て北氏と治るの職有り是と天  
職といふ上天子あり下備侯あり一郡一邑の其民  
と治る人其心わけてあるらぬ事あり此より後世封  
建の世より進昇平此は常論とて是祖文の初号  
も信て禱祿の中より天子とわけて備侯とあり高  
位も居り大夏の中より行馬戡闕の旁わく農民  
歳寒の苦とてこれ以てさうわくお供ありものと  
是と 継辭守文の居より下民の信を以て北  
條氏改る農の夢と獲て為て初とてた右も命  
て空浦も供せん事と書くと信全の笑はし事あり  
しは減日大邦世深君の口と氣より一山事あり

とも下民の信も結き事して知るや 中やもるも  
時わき大高も疑ふ事人君の天職ありけりわたり  
て人君大小の違有れども其の心は高世の君  
人君有りての人民との心はゆるるは瀟慢の心登記  
し其民とわける事草芥の如くもなり君一人者後  
と怒り毎日の成産と私欲の好むも其責し耳目の  
欲業と極むるは皆國民の膏血と後り血涙の残餘  
といひ欲業も信するは豈に仁の甚めありとや唐太  
宗うらまはし腹を割て腹も信しむ腹飽て身死その  
わりの故も家臣と姓國民めりて怒憤と懐しとて時分  
め違ひて其指麾も違ひて主人とて敬するは誰君不

君不可臣以不臣をわたりてと君不道めて士民の疾  
苦を顧みよと世祿の臣下とて心中めい君と怒り悪  
て甚良の節候きし忠誠の志ありは百人中よ二人  
より外ありとて孟子も君視臣如草芥則臣視  
君如冠雉とて君の良臣と候ふ事亦や臣の如  
く下し居り候は臣も君と冠敵の如く只の理の由  
ゆゆてむわらふ事わらふ事起る所也君不徳わら  
舟中の人心敵國ありとて之も古今人君の通弊わ  
らんと或隠士之け通弊ハ古も程今も如し人君あり  
ての人臣とのまらふわらふ故よけ治と倒め置てん  
はは政理旧微微とて之も之も確論ありといふゆめり

人氏有るその人君と心ゆる所は天子のよう徳度わら  
一國一邦のまあるもの天職とて之も群宿臣とて治國一郡  
之も流離顛沛候を疾疫の缺れ羅ると世活  
やうとて命をとり命をとり下の職をわらふ時を愷  
愷君子民の父母とあらわらむは庶民わらわらぬ者也  
尤も世邦回君の四政とてゆめに他の戒後行有る  
四の條わらひ縦いに改國中わらひ行まはし大暴政苛酷の  
政事なき候わらふなりわらひ何もの四政とてゆめり  
ハ收斂の臣とてわらひて民も荼毒の毒も達し事奉て  
わらひつゝい況はわらひ水旱蝗虫疾疫の流し  
わらひ万民悲愁し候を憂むは人君の世活わらひ

てかろことなる若れき大何きの四し海氏の例に於ては  
旋一返めて愛惠者なる稀なり窮民の救済お借家  
等の名目ハ有るも其愛ハ其吏の術中よ入て了か  
るし百姓の救世も亦ハ益亦却て諸ハ災害いじ  
甚後ハ強州の強動め及り其吏等收歛履車毎  
四政ハ任<sup>任</sup>民と多うて虚辞偽言と飾り民と詭  
わく人君誠め民の存亡と苦勞めを多ハ稀なり民と  
視る事子の如くも是ハ民の君と視る事父母の如く  
も是ハ有るも有徳の君ハ亦ハ稀なり是誠め天  
乃め成りて國家の人民と教育するも己く高  
の誠多しとい其功め代ふことわ其報とものと

心もなきハ百姓其思候ハ感後より平も人君誠一  
の心より出せハわく濟一家の父子兄弟夫妻奴婢あ  
ふら如く甚妻子女兄弟奴婢けお者歳寒ハ過ら其  
主人ある者此凍餒ハつていしを師一國家亦如是  
君と民と又母と子此一體と一人君の過ハ大  
極なき初ハ思る書々天視自我民視天聰自我民聰  
と有る人君能天民と生養せといある人君夫  
兵革の憂ハ暫く置り洪水大旱の殃ハ累ハ流  
離顛沛歳寒ハ甚ハ道途ハ轉死する者或夜  
夜流のの憂め逢つて一家男女之四百口若ハ七八口  
一旦ハ死とて村為人種と絶めをせし是ハ於て

いふ所の石仁の君といふは是れ中感部也と云い則は仁の心と察  
し俄に凶窮民を賑へ救ふと云ふも大なるの事か  
きい方乃に仁なりと云ふは賑へ救ふ方なり也臣等亦有司也  
茂於仁と云ふは仁なりと云ふは賑へ救ふ方なり也臣等亦有司也  
毎の寄粟と云ふは賑へ救ふ方なり也臣等亦有司也  
少の寄粟と云ふは賑へ救ふ方なり也臣等亦有司也  
少い其中心見救はせむ窮民は大半死に疲死に及ぶ  
豈に其中心見救はせむ窮民は大半死に疲死に及ぶ  
振貸はる事能は流民は教て本と考て酪と化て是  
と肺をハ酪ハ食事能は飢て死者什七八莽是と記す  
曰中陽九の<sup>海</sup>而六の會は遭て枯旱霜惶飢饉之き

甲子としきこの終と成るといふ有て以て述はるる世の  
人君も多めは道辭とわく者多し是君子の耻へき事  
わく今古の通弊なりといふは明君賢主といふも其  
天殃意迫の所は多し何の仁術思慮の者なきあり  
るあり者其本安の所なきと云ふは世の代々  
に多しといひ好む其備にあらずは其まありき事  
わく是世の人も知事なりといふは世の回めても先  
ほをの行はしといふは是れ第一と云ふは世の代々  
急務なりと云ふは世の代々急務なりと云ふは世の代々  
民といふは君子は君は能く事と云ふは世の代々  
て善生養人者也と云ふは世の代々



其聲下と生るる事とわたりていふ事とあり  
人君厚くけにふとわたりていふ事とあり  
己の嗜欲とていふ事とあり  
其の費とていふ事とあり  
又諸有司の廉潔とていふ事とあり  
探ひ毎秋穀登奉の時嘉民を救ひ預益得るを  
紀周十計萬慮して其力を尽すは王制三年耕  
必一年の食有り是を人の良法なり一國の一年  
の租入と四つありて之を以て多事とは非一と  
して是事少旱の利ありは天道の四時を一時

と申すは斯くして移すの如く三年移て一年の  
修りあり九年移て三年の修りあり二十年  
移て十年の蓄りあり初めて量千石ありて量  
少くは是ハ異國の昔乱ありても内國ありて  
是事ありて少旱の運ありても人を減らし  
空城も起るは大明の魏紀ありて是も四よ之  
年の蓄りありては仙居ありて賊起りて是も  
昔乱ありて城を圍む三年の蓄りありて是も  
さるる玉言ありては海もさるるありては  
縦天禍ありては是も天災の令とて下りて  
窮民と振郵の實惠ありては仁恵國なり

の進百姓も其恩以て穀腹とく所の諸の制令し沛  
事如きこと川流の下め者如く輕寡孤獨も心の  
め救りてや縦いいう所の仁恵ありて人心格とて  
時々却て激烈して所の災害発起せし事若一人  
の徳不流め依て也 義之の盛徳に感歎し其  
中めも之縁之年かして國中俾僅多しし如く  
司命とて將穀多く高糧し給いし倉庫と開き  
て輕寡孤獨の窮民と振い給ふ又者司命  
給い牛馬ハ人とも命とて耕耨の勞とるも者  
わく其老廢の所もむて山卸め無ふハ不仁の甚  
きもの如く此大貧民ハ此之用の者も穀等と費

事ハ止事とゆきし所わく廻村里の長も命して老年  
羸馬も少年穀と與て養育わきしむ減りし百年  
未我 東方未開のころ唯此處の如くと云  
人の治よりしめ給へて愛り恩會歎れ乃て云  
くまわく書曰皇天無親惟德是輔民心無常惟惠  
之懷と此之と謂乎農民稼穡の奇<sup>辛</sup>苦ハ白川侯  
の國本論も詳わくと云ふも贅也

距諫

余敢の世家と後よ紂王の人とわくや資辨捷疾聞  
見甚敏材力過人手格猛獸知足以距諫言足以



四の興廢ハ練三容事<sup>を</sup>を容さるる<sup>も</sup>者ナシ治礼の極  
概ハ千古一轍<sup>なり</sup>と後世人若間々捷敏<sup>なり</sup>と多クハ  
己一人の聰明と多クハ臣下の言と同<sup>なり</sup>ハ練路と塞  
く<sup>の</sup>もの<sup>は</sup>い<sup>は</sup>し<sup>し</sup>獨智<sup>ゆ</sup>めて<sup>て</sup>苟<sup>も</sup>荒<sup>の</sup>向<sup>も</sup>及<sup>ば</sup>ざ<sup>ら</sup>ば  
嗜慾<sup>を</sup>履<sup>事</sup>なり<sup>と</sup>臨<sup>者</sup>度<sup>なり</sup>と身<sup>自</sup>の<sup>欲</sup>も<sup>亦</sup>た<sup>亦</sup>  
と貴<sup>し</sup>四<sup>用</sup>虚<sup>耗</sup>と多<sup>き</sup>ハ<sup>ハ</sup>收<sup>斂</sup>の<sup>臣</sup>股<sup>肱</sup>身<sup>目</sup>と<sup>亦</sup>  
四<sup>中</sup>と<sup>收</sup>斂<sup>して</sup>民<sup>の</sup>疾<sup>苦</sup>と<sup>厭</sup>い<sup>し</sup>君<sup>の</sup>嗜<sup>慾</sup>と  
増<sup>長</sup>一<sup>國</sup>民<sup>其</sup>毒<sup>と</sup>事<sup>鬼</sup>域<sup>の</sup>如<sup>く</sup>其<sup>苛</sup>  
酷<sup>と</sup>收<sup>斂</sup>事<sup>非</sup>根<sup>の</sup>如<sup>く</sup>遂<sup>に</sup>邦<sup>國</sup>破<sup>弊</sup>して  
兵<sup>勢</sup>振<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>は<sup>は</sup>是<sup>の</sup>聰明<sup>の</sup>君<sup>弊</sup>なり<sup>と</sup>詩<sup>云</sup>民<sup>之</sup>  
訛<sup>言</sup>寧<sup>莫</sup>之<sup>懲</sup>召<sup>彼</sup>故<sup>老</sup>訊<sup>之</sup>古<sup>夢</sup>具<sup>曰</sup>予<sup>聖</sup>誰<sup>知</sup>

唯

鳥之鴻雄<sup>周</sup>庸<sup>主</sup>ハ<sup>是</sup>ハ<sup>異</sup>なり<sup>少</sup>人<sup>左</sup>右<sup>ハ</sup>不<sup>可</sup>分<sup>也</sup>  
多<sup>毛</sup>の<sup>巢</sup>ハ<sup>破</sup>了<sup>長</sup>秋<sup>の</sup>所<sup>也</sup>或<sup>無</sup>用<sup>抗</sup>器<sup>と</sup>集  
め<sup>武</sup>禽<sup>獸</sup>と<sup>多</sup>く<sup>高</sup>卷<sup>表</sup>或<sup>ハ</sup>宮<sup>室</sup>周<sup>房</sup>美<sup>麗</sup>と<sup>亦</sup>  
一<sup>或</sup>ハ<sup>揚</sup>蛾<sup>皓</sup>齒<sup>綺</sup>麗<sup>備</sup>と<sup>飾</sup>備<sup>一</sup>或<sup>青</sup>梁<sup>遠</sup>味<sup>一</sup>  
口<sup>腹</sup>之<sup>食</sup>其<sup>薄</sup>中<sup>去</sup>又<sup>ハ</sup>身<sup>後</sup>福<sup>も</sup>過<sup>ハ</sup>口<sup>糟</sup>糲<sup>小</sup>餐<sup>一</sup>  
ハ<sup>四</sup>民<sup>餘</sup>餘<sup>一</sup>ハ<sup>亦</sup>ハ<sup>將</sup>倒<sup>と</sup>身<sup>天</sup>遂<sup>ハ</sup>顧<sup>視</sup>セ<sup>ハ</sup>  
佞<sup>巧</sup>の<sup>者</sup>其<sup>言</sup>波<sup>辭</sup>と<sup>毀</sup>レ<sup>君</sup>の<sup>愚</sup>事<sup>と</sup>顯<sup>揚</sup>と<sup>亦</sup>  
事<sup>新</sup>と<sup>抱</sup>て<sup>火</sup>と<sup>防</sup>ふ<sup>ハ</sup>誠<sup>ハ</sup>亡<sup>四</sup>の<sup>標</sup>題<sup>然</sup>る<sup>ハ</sup>周  
書<sup>曰</sup>世<sup>録</sup>之<sup>家</sup>鮮<sup>克</sup>由<sup>礼</sup>以<sup>蕩</sup>陵<sup>德</sup>實<sup>悖</sup>天<sup>道</sup>敬  
化<sup>者</sup>歷<sup>萬</sup>世<sup>同</sup>流<sup>と</sup>一<sup>ハ</sup>ハ<sup>古</sup>年<sup>久</sup>き<sup>ハ</sup>人<sup>居</sup>奢  
侈<sup>ハ</sup>流<sup>是</sup>祖<sup>之</sup>功<sup>と</sup>空<sup>一</sup>ハ<sup>是</sup>者<sup>有</sup>り<sup>豈</sup>悲<sup>ハ</sup>

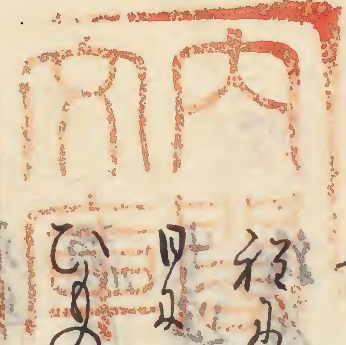
敬

譜

らさる哉老臣家宰も其流と曰くして後者亦又  
三の忠臣のつとめと此歎きも其君諫路と開き  
言と答を以て者耶詩云凡百君子莫肯用訊聽言則  
答語言則退此人君諫と距事と欲さるもの後今人  
君言と求もくも進世の上下大に隔りし所は下も  
君の威嚴も若くして其言と其事能は  
○況や君の怒氣赫々たる時よりして其言と其事能は  
者稀ぬる群臣等憚り戦栗して其言と其事能は  
領下の逆鱗も觸る事と恐るる所は忠臣烈士  
其言と其事能は君の暴怒も觸る  
て息言又や其言と其事能は放流廢滅せらるる古の龍逢比

干し事 吾朝の武田信埜の長馬場三郎濃と山縣  
三郎景隆進世の根津之太助と其言と其事能は滅す  
上も其言と其事能は我

神祖の仰も人君の言も家元と持へき事なり我帝  
も其言と其事能は君の怒も其言と其事能は  
願ひ諫言といふ家元ハ致傷めて一書陰とせらるる  
も進も其言と其事能は心も其言と其事能は  
御言と其言と其事能は命と其言と其事能は  
歎も其言と其事能は其言と其事能は世も其言と其事能は  
又歎も其言と其事能は其言と其言と其事能は



子孫がし侍もいれ致傷の働きい生れそのよは富あり  
 也しそまてい違てそ君の無んわると致き数直  
 諫さそい忠言耳ゆ途よおめてる君の心よあそあ  
 程め常ゆいい姫もま唯乱顔めていひいらま  
 見れ味まゆわふものわるとそまよ新進容儀の端  
 いのそ件の家老とまゆ福て終らる程めいとそ  
 ま君の自んもあそわると行といそも用らま其  
 付いゆわ忠臣も退屈もあゆ或い病氣と稱す或  
 い致はと福てそあそ引退て多別とふそがし終ら  
 ま君のまよも肯らゆらゆい致なり退て極終  
 まわはまそ君忠と務て多討めらあそ又い押死て心

さあ中しめさふめてあそそまてそ致し心めゆけい  
 多考報國の志とあそそ致し世ゆ終者忠臣と  
 いそはそめ此とまは戦場の一由流らるて中とまそ  
 わると作らましとわると忠不肖の吾<sup>れ</sup>いんと  
 も城ゆ肺肝ゆ流て殺者そへ中わると室前も保  
 く致みせらま誠ゆあ世神子孫の時事ふやあ及い  
 いあそ人君あそ人の山き澄戒とわふいさゆそ保  
 わるとまてとまて世の人君あそ者い能く保すの  
 情と混分て其そ各とそ守向へし此方与守向とま  
 ハ臣下ハとと聞者無し中庸めも癖好同好察  
 通言此語ゆ頼らるそまハ



おろしき事共ありしをいへりて上も下も我々の  
過よりしをいへりぬるの如くはさきと少方あり者ハ心安  
き友達傍軍あり者ハ互に力のよの悪き事と云ふ  
て意味より程り意有りて改め事多きは少方の言  
ありて少方あり者のハ友達傍軍と云合て心安  
けふと云ふ事もわけき日常ハ世合りのては  
家臣<sup>也</sup>新進をかりぬるこそまじくハ大いこの事とは  
少をわるといふぬ程ハ我道と知るべき中か  
知らぬは改めしはけしと云道とのわるといふハ  
少方の程<sup>也</sup>いふやし<sup>也</sup>古より富貴ありもの圓を  
多し<sup>也</sup>家とてとま<sup>也</sup>大い<sup>也</sup>我道と云ふと云ふの無て自ら

めらる事と云ふと云かりと云ふありしをいへりて我の意  
事と告知する者ハ大切はと云ふべきありしと云と 作と云  
下ハ少後を感流して返ぬ程<sup>也</sup>世めて考へらる  
此沖と紫のそきと云ふと云ふ百程と云ふ事ありし  
と云ふ月の吾輩やと云ふありしと云ふ人君の諫めを  
辨<sup>也</sup>の道と云ふ知と云ふ 況今白路乃に汝朕心若葉非  
瞑<sup>也</sup>疾疾弗瘳又亦逆繩則正后從諫則聖と云ふ  
人君の諫めと云ふと云ふと云ふ人君無道也と云ふ  
距<sup>也</sup>と云ふ其あるは世縁の老臣ありしと云ふ其地  
行<sup>也</sup>ハ誠ありしと云ふと云ふと云ふ侍縁の厚み四朝也  
或ハ妻子の愛惜より云ふ又ハ危殆其方ありしと云ふ



惟(四)言者稀なり此尸位素餐の責と帰る  
こと十九九なる者なり又時勢といふは  
君の無道といふは老臣の罪の道き難なり孔子の  
見義不為無勇也の語也而拙多し練争は古より終  
き事といふなり孔子曰忠臣の練居を成るは猶練意練  
降練直練諷諷なりやんて度りて以て其の諷諷は  
遠くと宣へり宣へて世にまはるる君の非を伴ひ  
事ハ難き事なり直練の語は君の非を改めよ若くは  
己の志は通はざる君の非も改めよ通は相激烈して  
却て害とすなりあはれも諷諷と稱し終ひて之を  
其の非を改めよ人ハ杞都にて練争とすも至る

難

此の事ハ君の非を改めよと云ふ事也或ハ事極小  
にして微なり直練の切なり微乎微乎其意ハ  
遠く自然と君の是非を改めよと云ふ事也人ハ  
卑極の人ハ此を以ていかに或ハ諸葛孔明に或  
ハ隱語と云ふ淳于棼は楚莊王と練東方朔は帝  
と感をもつた彭越は練と云ふ人ハ却て掃  
ねん平仙臺の端儒某は撰もつ書め練は其の  
例と載るなり其言と云ふ人の論議のたは練の大  
臣は其の非を改めよ君の非を改めよと云ふは偶  
然といへば練者有るは忽ち不追ふ故て職を刺すを  
刺して死すと云ふは自然と忠臣の道と塞て只今

偶

曰君がねらふ事の時とて日と送ふわらひ  
君が君長も臣の國多し朝くは事石のよの大臣は  
練役の長と定め首て行ね君の心はね事とて  
てし決して罪を悔いと定格とて首て悔らさ  
自然に自方の地をなむわらひ地を人知事ハ國家の幸  
と成るわらひ可也又一つは別れ練役をなむわらひ  
わらひ家先職の者わらひ少く無令新練めよ若し編て  
不練者とい罪とて中後と直下と亦家先の同役一統の  
を令をゆて能心を令を練むし不練者とい同役  
より言して職を利しとて國家の定法とてさ  
け上下者地をわらひ家存す國治すし誠めわらひ

ハ二方の為のしめ何しハ 三戒ハの忠意ハ國ハの憐  
慈文武の基ハけ事わ過るわらひわらひ大將たる  
人能く簡し練をなむし下しけ既甚簡多  
ゆて人君わ湯ある信わらひ孔子の訓練とては  
却てまやもきんわらひ秦誓曰責人斯無難惟  
受責俾如流是惟難哉又曰尚猷詢茲黃髮則  
罔所愆此之謂于世々人居る者能察諸

似而非

夫國の家は治勢も勅令も百姓と接安まら者ハ人君  
の任也進てハ忠とて事ハ心は進てハ過と補ハ

事と云ふは卿大夫の任なりと邪と防ぎて善め備すき  
制令の下めはつるは諸有司の任なりと書云在知人  
在安民故曰國之人と登用する事ハ至て難き  
事なりと云ふて明君賢王の其人と登用する事ハ  
亦始者賢者なりとて登用せしむるは後め不肖者  
なりと云ふ或は流刑殺せしむる物にめ付者ハ  
皆不肖者なりと賢者の聰明と蔽塞せしむる者なりや  
惑つて亦不明者賢者なりと云ふ人をして供事する事  
ハ亦始者其器用なりと云ふ概め備はれし器  
ハ良匠の器と云ふや器ハ匠の用と云ふは終く雖ハ  
絶の任なりと云ふ各其任を使ふして任官の用と

三章

亦も人なり其方は徒て是と用きハ天下は善なり  
備ふ事と云ふ求へしは是人を善めしと云ふ  
是古より通理の備なりハも終りて善なり人  
不同如其面人間の如く其向の如くは遠く亦  
文幹も又各異なり是古天下の人士ハ皆中等の  
多しと云ふ孔子も上智與下愚不移又性相近習  
相遠と云ふは又善と云ふは中等の人お多し賢者  
ハ稀なりと云ふは孔子も中等の文は完遠めなり  
云ふ事と云ふは人君善くして賢者を得ん事と云ふ  
事と云ふは人君善くして賢者を得ん事と云ふ  
事と云ふは人君善くして賢者を得ん事と云ふ  
事と云ふは人君善くして賢者を得ん事と云ふ

ありて其思ふ如く非なる者も大衆の人あり是人の  
心も僅きものなり何れも大衆の人其  
力衆人も傑出したる止と通凡ゆる好言も巧  
中も潜藏して不も影まひに縦横を弄する其動  
静も遊て其志の欲と不と何んを察し言を巧  
して眩惑を起す歎くも思哲の如く慕ふて詭詐の  
術と備飾して人の心を勝るものありて思者とい  
ふも其巧言も漫濶し彼を偽りめ心おと能く思  
察するも卓絶不羣の才用め立なき者ありとい  
ふこと誠にも小徳にして是れ其の思者といふ

三幕

思ふてその人ありて因て思へりて思ふて思ふて思  
はれ及い位急々文を成於己う掌握せられし  
慢者修められし漸く發動し修毒の改國民と  
詰り或は骨を割しめたりと云ふあるは固き  
也んと歎するも是れ事詩也茶を以て初めしめ  
賢君の勿れしと教流し或は誅戮し國家の害を  
きり世に梅安と周若庵といふ是れ及んて也  
大衆茶毒の人也又一説あり明君も大衆茶毒  
を知りて是を用きハ常人と違ひ速迅の  
用めりて事あり時之ハ良醫の毒茶といふ腸胃を  
洗し五臟を潔淨して其印のちりて一腐醫ハ是

と申すは其人を得る者多し彼れ其れなりしものあり  
 漢高祖は韓信を壇上におく唐太宗は李勣を  
 用ひ高祖は陳朝を滅ぼし西征の任を授け吾  
 神祖の要する所の役を福治と別とを海内を治し大之  
 保するもとを参用を治すめき良醫の毒を参用する  
 異のいふ通は大切をわきま及り彼れ毒穢微瘳を  
 いふも教養をりりゆふをわきま及り大なる英武を李勣  
 と参用して大切をわきま其毒穢の瘳をいふとて  
 御して一旦置列の都督を熊天子の遺命して是  
 と申すあり初孫を托するの大郎有る其を命せり  
 らしめけち宗没して後武氏の帝位昇るし時廢

之の仕勤る一言め決るなりしを勳と練は知  
 て論<sup>い</sup>勳<sup>初</sup>て之も有功の賢良等悉其禍と蒙る唐の  
 子孫或は之とて大なる明智も彼れ眩惑せしむる後  
 世論者はと進歎せり然れけ曰君を將ある大も得  
 たり是とて古と歴歎するは是も夫差の大宰嚭  
 小放る秦ノ二世も趙高も放る楚平王も費無忌も放  
 る吾朝の武陽も放る孫少卿も放る長坂も放る宋も放る豊  
 臣秀頼も放る大郎治長源も放る北條氏直も放る  
 張也憲秀も放る歴代打撃はるる降る者も皆庸若  
 閑も放る臣のぬめ割も放るいふもさるる中も常も歎  
 是とてふハ齊の桓公も放る管仲も放る知て是と

用い覇王の鴻業をわきて賢君を稱する者ありしが  
み管仲病あり望才易牙の管仲を継とせん事を  
問ふ管仲云けり子と意自ら害け人信ねざる  
て善君とせよと云ふもやと云へて止むを桓公用い  
遂に二子とて回車し委任せしめ歳も有らざる  
よ二子乱と起し桓公病ありしより右の者と遂にけ  
宗と関て借才しとる者ありしに安め終て桓公  
死して尸出たると出ると至ると桓公の庸の君は  
池にけりや望才管仲め齊の才ありやと任用  
せしめ終つ二子とて管仲を眩惑せしめて遂に  
千歳の汚名と遺せし彼の賢めして世に名ある者の

人を知りて其を治す事とて知るべきものあり  
の者もけね子の者も終つ其の悪の者と免悟せん  
豈社稷の才事とあはせんやけねる者も其の才  
と云ふも亦中柄とありしに巧言其辭も其の才と  
蔽塞せしむる遂に傾覆流弊の憂と招くをきく後  
世よりして是と云ふも其の才の才の才の庸人  
を考へしむるも亦批發しおを悟らるる其の才の才  
るると云ふも亦其の才の才の才の才の才の才の  
思ては賢人君子と云ふも亦其の才の才の才の才  
の可欺不可周徹の虚ありし巧言其辭も其の才の  
一旦の欺るる其の才の才の才の才の才の才の

於ては其の事と外に漢の京房元帝と幽居の君  
不忠の臣とて言ふるは其の是れ也任して國と亡とせし  
る事以て論じて其の事ハ誠ニ四終せ於てハ確論を  
らる今古の通弊あり其れ湯とて尹後と誅し文と  
誅正と誅し國との管蔡と誅し太との章と誅し  
管仲と誅し子牙と史何と誅し孔子の女也卯  
と誅しとて其の論は其れ也君子の誅とほ  
めしめぬ者あり是れ非也其れ者守古法之見惡如  
農夫之務去草焉其莠莠蒞宗之絶其本根勿使能  
殖則善者信矣君子仁惠とて多民と撫安と  
ふは其惡の者ハ良民ハ害あり除とんハあてらる

詩云君子信盜亂是用暴盜言孔其亂是用峻又云  
躍々免免遇犬獲之是此と謂乎

任使

語曰為君難為臣不易とあり人君あるの難は事ハ天  
職あり其天職の難は事ハ人とて其れ也人君とて  
易かき事ハ其職ハ忠誠ありて其美と稱頌し其  
惡と匡救し國あるの事と補ゆとて其れ也孔子曰  
而錯諸狂則民服舉狂而錯諸直則民不服とあり  
傳云是ハ積材の事とて其れ也其直なる材本  
と相違ふものハ積材とて其れ也

賢者と登攀して羣臣のよきをとりしめ國政とまはせしむ  
は其徳の者も自れと化し有徳ゆ化服する者あり賢  
者と登攀する事ハ誰か知り事ハ其夫人君賢者  
と奉る一修し終てハ心で終り其心ハ周君庸を以  
其人ハ賢者なりといはる是と登攀する事ハ其心ハ  
邪智の人ゆして回民其荼毒と蒙り國家の乱階と  
引出する事奉て救へし人君の自後達しハ大印ハ  
ふ者ゆてふハ百姓の害とする者あり是前篇ゆ詳  
ゆ論せしあり人君ある職の終き事ハ其人と登攀  
するハ其心ハ純く賢く純く不肖と定む終きあり范  
守として決断しかく念用て念達し何とて其

賢不肖と定めんや皆人君是と臆めぬて己う好む事  
阿ふあり是と其心をめし其善事千里ハ  
其心を善事あり孔子曰為政在於得人又以身  
誠め千古の格言あり人君賢者と仰事と敬は  
え其方の徳りと砥礪し又賢の遺訓ハ法し朝ハ  
省む夕者てこく徳りと修めし其心ハ其心ハ  
人ハ微終きものありあり是こく者て規矩準繩  
として君下ゆ修む其人の言はるを聞てハ徳と道と察  
て其賢不肖と定めし言と行と違ふ人ハ其心ハ  
修む徳と定む事あり書云静言庸違の類あり  
其心ハ漫む登攀あり終り終り人君己う不徳



不道のゆいとして位と譽ると案をさるるあり受者  
のゆいなきものゆいこころゆい守こころ不徳の  
ふ目めて受者といひ是と譽るありは其れ其れ  
智の者回宗あり格とあり受者ハ陛下ゆ隠まて  
顯まゆ不肖者の進容せらるる通て回宗の亡滅と  
振ゆまふ進哉夫匠人の大慶と語堂とらゆはと  
良材ありといふも規矩準繩の不直不良ありと  
用てハ材幹の曲直ハ見ぬありあり良匠ハ先  
規矩準繩とて一と絶て後材幹の曲直とて一ハ  
毫厘の違ありは之をゆめ於て大慶の経営結構  
の巧ありも心の傳ふ其技と絶てありやあり人若

え

此こころ方の規矩準繩とて一と絶てハ匠人のゆらきありの  
ゆい取人以身の言ハ絶て格とあり湯玉の伊平ゆ  
ふ文士の呂望ゆ於て高宗の傳絶ゆ於て文士の趙喜  
狐偃ゆ於て昭王の郭隗樂毅ゆ於て穆公の百里奚  
蹇叔ゆ於て也

神祖の三傑及陛下の衆士ゆ於て皆智勇兼備の者也  
君臣のまははる受ありて國君の忠良ゆ於て皆見ゆ  
まははるありて同業ありて同業ありて者ゆは其れ  
の堅不肖者ゆ於て知るやあり人々の登降ゆ於て六乃  
辨ありて維令人を其受者ありて事し知るた用て事能  
さる者あり其れハ其人の氏族早衰ゆて或ハ農高

もるも又小まの多家より出る世派のま又と  
側目して其卑級なるを侮り其程と擧て謝  
一尤虚少使て多火堂と作るおしよ人の畏る者  
らぬ者なりお若め是と信じて是と無相袒お信  
ち若めをていしと回をひめけぬ所ハ思と  
用る事なり程きハ是人君の不足量ぬ友なり是古  
今の通弊の二つあり君受を知りて漸くは登用して  
も克任する事能い者なりといふ程思ふなり  
ねてハ使迅の是を請ひて千里の任をわす事能ハ  
一碌とて驚馬と伍なり云々人といふは其  
職にふりあやしほそ人と持をわして使給ハ人

伸さる者あり漢高祖ハ金匱要方と陳年め  
五問をいむ其病をいふと怒りて其出入と問ハ  
亞父等と離問せらる高祖の人といふ事と  
人といふハ其職にふりあやしほそ人といふ  
めあり不肖者ありいのみハ才能も顕あり  
抑く抱くハ人といふぬのめと練病をいふ  
残る單文と治やハ時ハ物書者の後より時  
抑く無意わめと叱りてハ君のま任すす  
して其治方の中からさうと考ふハ  
の二つあり又君ありた君の長と探さぬハ  
甚ありた君の長ハ君の身目ありてた君の長

便僻論彼者あまの君の耳目大に遠く事ありて  
や他國他郷より受けるの事食事もあはれ有らん  
其人端正博識ありて國家の事ありて人々  
を彼便僻の者より等しくあはれ通してことなき事  
と志して推教する事とわきまを極くの事候  
起りて其津生しと君の心と疑ひて通して事  
能はざるも至る詩を他山石に可改玉と有るは他邦  
より来りし者も受けるの事とて是と用て國家の利益  
ありしこと稱せし終ありて事今の時分めては終事  
ありしと通弊の事ありて英主の心は通て文能と志候  
事曹孟徳の如きもの有る或は言語の間は終

或は節制の有りて野に事ありて君子の言辯と候  
ひ下し一々の事候も肺腑より治し方命と顧する  
者あり又一々の過をめて志と愛する事あり板垣  
信形も甲陽股旅の老臣ありしう信をハ子孫信命  
う廟へあまもつる満きいやくか月のことと有る  
や人の世の中と書て興へしと信形位列し還て  
け廟に置く事候は君臣の物氣ありし由  
は信じてあはれしめて御念ありし我林社も  
とけ勝園とありし其機控減め我君の如く  
ありしは敵國より君威の敵とあるありし  
さうも君の事ありては神とありしありし君忘精

會して我を視まると歌わたりと其より志操忽ち愛  
一返務部代と辭憤懣して所より上田の汲み歌  
中人の入して歎息も信形あまると以過る事ありゆえ  
ゆきも始終の語方と考るゆに信をうんとわたり志措人  
わりの固て信形其律ゆ觸さる事と名作一血憤  
懣せり者わたり人君の言辭と信さる(けんや詩を白  
圭之玷尚可磨也斯言玷不可為也忌諱事ハ大  
抵人君ゆは是あふ人ハ多し愛憎の愛ある者わたり  
ゆえとわきい君臣の元より又子の親わたり妻妾乃  
愛わたり我として今也一者あゆ危角君の心は嫌  
疑ある者わたり疑あつてハあはれも事わたり此思は

其肺腑と云ふ事あり稀わたり韓非子を衛靈公より  
彌子瑕と寵愛せり色よりこの合信りとの桃と君より  
秋一君の車ゆ載ゆの病と問一は姫は是と忠告わ  
りし稱一ありし終ゆは不忠不敬わたりはして大罪  
とせらるる是人主愛憎の愛わたりゆに君ゆは賢者ハ  
愛らざる通弊あり又四家國民も其仁ある處  
きりハ愛め君の愛わたり語を楚人金玉と愛とを以愛  
人として愛とを以てあつゆに人のハ得難者わたりゆに  
寵遇り右厚く威権も盛わたりゆに得てお家もわたり  
ゆに其格好と好み其格と案をりゆに圓城方より  
わたり寵姫と或は嬖臣ゆに過るて厚く寵賜と送る

分

是と謀り日夜君の心を苦しむるは其人の殺と事  
御誘阻し或る鷹殿交至る歲月を移して漸く其を  
御阻阻して君とて疑とせしむるは其人の殺と事  
又の衆は隔る事古く多し者ありは是浸潤之留  
膚受計し御不行是可謂明也己兵と孔子も言ひ  
人の君の心を疑事とて多し戦國の時おれは是  
あり是六通弊あり御は浸潤の留膚受計  
と懐く懐く事事ハ無一唐史と記す忠臣君子の  
衆も隔る事事擧げておれは中々長歎は是は御あり  
信云知臣不如君知子不如親と有るは父子ハ骨肉の  
親あり君臣ハ義とて合りのありは亦ハ骨肉

の憂愛なく親切ありは御は其を其嫌疑あり  
ありて其計甚阿ありは一朝卒御とて骨肉の  
思も亦く断絶も事あり尹吉甫ハ貴相あり  
伯奇ハ孝子あり然れは後妻諸日伯奇ハ妾とて  
て叔邪公あり吉甫云伯奇ハ慈仁あり是けり有  
らんやとて御をさしけりは後妻の云御ハ妾と  
其房中ハ置て君密に樓上より伺ひ察しとて  
後妻毒物を衣服の領に御着て伯奇とて是  
と擗しと吉甫大に怒り伯奇と野に放り其後  
宣王出遊する所吉甫是れを伯奇歎と作り  
て感動せしむ吉甫是れ感悟して其妻と射殺

とそとて録すは羅姫の申生と<sup>潜</sup>給殺さるる君  
不明ぬまはるもさうわらう吉甫の賢者かを著  
子と叙ハ行とやふは其計と施すとさハ後をりも  
其情と掩す孝子も其志とる事能ハし没也君  
臣の守りぬれて<sup>潜</sup>給一たい其旨ぬ行と付ハ嫌疑忽  
みゆる事必せりや感歎しとて魏の文とわら  
樂羊う畏ぬると知て將軍とわら中山と試しと  
ぬ月やて中山降ぬい安ぬ於て嫌疑ぬいし  
諛書教ふりて逐歩満きとも文と疑ハし逐歩中  
山と抜き切と逐しと樂羊還て後ハ其逐とて逐て  
るももさハ樂羊逐はると其辱と謝せり樂羊

畏ぬるとして文と明ぬきぬハ馬と其切と逐人  
や多載の下人<sup>君</sup>まゐるぬぬのぬ能き親能ぬぬ  
難哉風雲の會千載の所ぬぬとて<sup>一</sup>も<sup>一</sup>ぬぬ  
うぬ



招隱館漫筆卷之一

Handwritten text in a cursive style, likely a letter or document. The text is written vertically on the right page of an open book. The characters are dark and somewhat faded, typical of aged paper. The writing appears to be in a historical Japanese script, possibly Kuzushiji. The text is arranged in several columns, with some lines starting with a small mark that could be a date or a specific reference. The overall appearance is that of a historical manuscript or correspondence.

